

砂の旅人

2009.01.07

旅人、と呼ばれる男が おりました。

身元がわかるようなものを持たず、名前を尋ねても首をふるばかりの
その男は、いつしか、どこへ行っても ただ **旅人** とばかり
呼ばれるようになっていました。

旅人は、世界各地で さまざまな仕事を してきました。

彼は 器用なので、どんなことでも
ひとつおり、いえ、人並みはずれたレベルまで できるようになります。

そんな彼を 誰もが 褒めそやしましたが、
彼は、頑として そこに とどまることを しませんでした。

いや、違う。
僕が探しているものは、これでは、ない。

誰の目から見ても、
どれをとっても、彼の手がけるものは 一流でした。

しかし。
あと1歩。あと1歩で、彼の仕事は、
誰の手にも及ばない 完璧なものになる。

その大事なところで、彼は すっと 手を引いてしまうのでした。

いや、違う。
僕が求めているものは、これでは、ない。

そして 旅人は、
自分が本当に探しているものを求めて、さらなる旅を 重ねるのでした。

ある午後、海岸沿いを 東へと 進んでいた旅人は、
どこかで見たような光景に 目を奪われ、その歩みを止めました。

浜辺では、小さな男の子が、砂のお城を つくっていました。

彼は、砂の城をつくるのが 得意でした。

砂を高く高く積み上げていく 自分だけの秘密の方法を、
知っていたのです。

その日は、ことさら高い城が そびえていました。

とうとう 自分の背丈を超えるほどの高い城が出来上がり、
あとは てっぺんに 星の飾りをつけるだけとなりました。

彼は いつも、お城が出来上がると、
塔のてっぺんに 星の形をした飾りをつけることで、
その城を 自分のものとするのでした。

見て、見て！ ママ！！
僕のお城だよ。
この最高のお城を、ママにあげるよ！

男の子は、大きな声を上げて 振り返り、
波打ち際から離れたところで 彼のことを優しく見守っているはずの
ママに向かって、駆け出そうとしました。

が…
そこに、ママの姿は ありませんでした。

ママ！
ママ、どこに行ったの？
僕のママは…

男の子の耳に届くのは、波の音ばかり。

ママが 座っていたはずの場所には 誰もいませんでした。
白いパラソルだけが ぽつりと 残っています。

呆然と立ち尽くす彼の背後で、大きな波が 立ち上がりました。

あと1歩で 完成するところだった 砂のお城が、
大きな波に飲まれて 崩れていくのを・・・

彼は、振り返らずとも、背中を感じていました。

旅人は、はっと 目を覚ましました。

浜辺にいたはずの男の子は もちろんのこと、
彼のママも、白いパラソルも。

そこには、なにひとつ 残されてはいませんでした。
いえ、最初から そんなものは なかったかのように
思えました。

彼は、本当は知っていたのです。

自分が望めば、
どんなことでもできる、どんなものでも手に入る、ということ。

そして。

自分が 世界中を旅しながら 探していたものは なにか？
自分が 完成を怖れているのは なぜか？

・・・ということも。

これが最後の旅になるな。

そっと つぶやくと、
もはや 旅人ではない 男は、南へ向かって 歩き出しました。

あの日の砂浜を 目指して。

いつしか あたりは 薄暗くなり、
彼の頭上には
美しい星たちが きらきと 輝きはじめていました。

いままでの彼の経験を、称えるかのように。

旅人という呼び名を捨てることを決めた男を、
見守るかのように。

「後ろを振り返ってごらん。
誰もが、自分だけの星を従えて 歩いているんだよ。」